



Himi

# 第2分科会

氷見市

氷見市芸術文化館

## 過疎地域持続的発展優良事例発表会

【コーディネーター】指出 一正 氏 (『ソトコト』編集長)

【発表者】総務大臣賞及び全国過疎地域連盟会長賞受賞団体

### 過疎地域持続的発展優良事例発表会

#### コーディネーター

## 指出 一正 氏

『ソトコト』編集長

『ソトコト』編集長。富山県「くらしたい国、富山」推進本部本部員、島根県「しまコトアカデミー」メイン講師、山形県小国町「白い森サステナブルデザインスクール」メイン講師、和歌山県田辺市「たなコトアカデミー」メイン講師、福島相双復興推進機構「ふくしま未来創造アカデミー」メイン講師、奥大和地域誘客促進事業実行委員会、奈良県、吉野町、天川村、曾爾村「MIND TRAIL 奥大和 心のなかの美術館」エリア横断キュレーター、群馬県庁31階「ソーシャルマルシェ&キッチン『GINGHAM (ギンガム)』」プロデューサーをはじめ、地域のプロジェクトに多く携わる。内閣官房、総務省、国土交通省、農林水産省、環境省などの国の委員も務める。経済産業省「2025年大阪・関西万博日本館」クリエイター。著書に『ぼくらは地方で幸せを見つける』（ポプラ新書）。



#### 過疎地域持続的発展優良事例発表団体 (発表順)

総務大臣賞	一般社団法人筆甫地区振興連絡協議会 [宮城県丸森町]
全国過疎地域連盟会長賞	株式会社ホップジャパン [福島県田村市]
総務大臣賞	山古志住民会議／ネオ山古志村(山古志DAO) [新潟県長岡市]
全国過疎地域連盟会長賞	論田自治会及び熊無自治会、ろんくま移住促進委員会 [富山県氷見市]

## 歓迎挨拶



### 林 正之 氏

氷見市長

皆さんおはようございます。ご紹介をいただきました、地元氷見市の市長の林でございます。

本日は、「全国過疎問題シンポジウム2023 in とやま」第2分科会の開催にあたりまして、地元市長として歓迎のご挨拶を申し上げたいと思います。

本日は全国各地から、ご来賓をはじめ、たくさんの皆様方に、ここ氷見市にお越しをいただきました。心から歓迎を申し上げますとともに、ご出席の皆様方には、日頃から過疎地域の振興に格別のご尽力とご高配を賜っておりますこと、改めて感謝を申し上げたいと思います。

またこの後発表いただきます、昨日過疎地域持続的発展優良事例表彰を受賞された4団体の皆様には、心からお祝いを申し上げますとともに、これまでのご熱意と、ご努力に対しまして、深く敬意を表する次第でございます。

さて、氷見市は、昭和20年代には人口が7万人を超える、そういった時代もございましたが、現在は4万3000人あまりとなっております。この70年間で4割の人口減少ということとなっております。このような人口減少の進行によりまして、平成29年には、市内全域を過疎地域として指定を受けまして、過疎地域自立促進計画を策定し対策に取り組み、令和3年からは、過疎地域持続的発展計画をもとに、対策を講じているところでございます。

そうした中、国立社会保障・人口問題研究所による本市の人口将来推計におきましては、2040年には2万9400人と、3万人を割る状況に陥るとされておりまして、それに対しまして、第2期氷見市まち・ひと・しごと創生総合戦略を策定して、3万2700人を確保することを目指し、人口の減少を抑制するとともに、人口が減少しても市民の皆様が幸せに暮らせるまちづくりを進めているところでございます。

その中では、地域の暮らしを守り、地域課題の解決に取り組んで、持続可能な地域を作っていくことが肝要でありまして、それに向けて、その実情等を一番よくご存知の地域の方々、自主的、主体的に取り組んでいただくことが効果的であることから、市内全地域において、地域づくり協議会の設立を目指して取り組んでいるところであります。市では、

平成25年に財政的な支援制度を設けますとともに、各地域に地域担当職員を配置するなど、人的にも伴走型で支援を行っておりまして、その効果もあり、現在15地域におきまして、地域づくり協議会が設立され、残りの8地域におきまして、令和8年度までを目標に、設立に向けた取り組みをしているところであります。

この後、午後から市内の現地視察が予定されておりますが、本市は、晴れた条件の良い日には、海岸線から富山湾に浮かぶようにそびえる雄大な3000メートル級の立山連峰のパノラマがご覧いただけますとともに、日本農業遺産にも認定されております持続可能な定置網漁業による、これから冬に向けて旬を迎える氷見寒ブリを始めとした四季折々の海の幸に加え、肉質が高く評価されている氷見牛や、日本ワインコンクールで金賞を受賞したワインなど、里山の幸も充実をしているなど、豊かな自然が生み出す食が多彩でございますので、どうかそれらの魅力も満喫していただければ幸いに存じます。

結びになりますが、本シンポジウムの開催にご尽力をいただきました関係の皆様方に、感謝を申し上げますとともに、過疎地域の限りない発展と、そして、本日もご出席の皆様方の今後ますますのご健勝、ご多幸をご祈念申し上げまして、歓迎のごあいさつとさせていただきます。

令和5年10月27日、氷見市長、林正之。

本日はどうか皆様よろしく願いをいたします。

## 第2分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会

**指出**／皆さんおはようございます。お忙しい中お集まりいただきありがとうございます。

今回、過疎地域持続的発展優良事例ということで、この氷見で4地域の皆様のお話を皆さんと一緒に共有できたらと思います。

私は5年ほど前に氷見市にお伺いして、関係人口のお話をさせていただいたことがあります。その時皆さんに温かく迎えていただいて、お土産にホタルイカ、夜獲れたばかりのものをいただいて、編集部のみならずとすごく喜びながらいただいたことが忘れられません。

僕は日本のタナゴのことが大好きで、イタセンパラがいる氷見はなんて豊かなんだろうと常々思っています。ぜひ氷見市のアイテム、お土産アイテムで、イタセンパラのキーホルダーを作っていただくと、僕は100個ぐらい買おうと思いますので、ぜひお考えください。

ではここからは、皆さんの地域の活動のヒントに繋がるのではないかと考えております4組の、実際に自分の地域のことを愛されて、思いとともに素敵な活動をしていらっしゃる4組の皆様のプレゼンを、皆で聞いていきたいと思えます。

最初は宮城県丸森町の一般社団法人筆甫地区振興連絡協議会、吉澤さんから発表をお願いします。

### 一般社団法人筆甫地区振興連絡協議会 [宮城県丸森町]

**吉澤**／宮城県丸森町から来ました吉澤といいます。今日はよろしく願いいたします。

いただいている時間が20分あるんですが、半分は動画を使ってお話をしたいと思えますので、手短な報告になるかもしれませんがご了承ください。

先ほど氷見市長のご挨拶も聞かせていただきまして、氷見市でも地域づくり協議会が立ち上がっているとお話を伺いました。私たちが今日は、宮城県丸森町筆甫地区というところの地域づくり協議会のお話をさせてもらいたいと思えます。この筆甫地区のある丸森町は、宮城県の一番南に突き出たところにあります、その中の一番山間部の県境にあるのが、私たちの筆甫地区ということになります。人口が433名で、高齢化率も62.36%まで上がっています。このように、本当に高齢者のおじいちゃんおばあちゃんが人口のほとんどを占めるようなところで、私たちはこの地域をどうやって持続させていくのか、というようなお話、そういう取り組みをさせてもらっています。

平成22年に町の方から公民館の指定管理を受けまして、そこをまちづくりセンターという名称に変えて、そこで住民が自ら、この地域は今どういう状況だからこういうことをしてい

かなければいけないね、というような話し合いをして、事業に取り組んでいます。

なお、丸森町はとても広い町でしたので、公民館だけではなく、役場の機能の出張所という役割も持っていました。そういうわけで、出張所の業務と公民館の業務をやりながら、かつ自分たちの住む筆甫地区をどうするのか、といったことを事業にしています。筆甫地区も、この氷見市さんと同じで、中小学区にそれぞれ単位自治会協議会がつくられて事業をしていますが、この地域づくり協議会というか、地域運営組織ですね、やはり何のために仕事をしているのかというと、ここに暮らす住民の方々が安心して暮らせて、活気があって、仲間がいて、そういう場所をみんなで作って、という目的をもって話し合いをしています。

この地域づくり協議会などというのは、どうしても町からの主導型で作られることが多いんですが、スタートはそうであっても、私たちは決して行政の下請けでも下部組織でもなくて、この組織が自分たちのための組織なんだということを常に意識づけしながら活動をしていました。住民の方々から全戸で中学生以上の全員にアンケートをとって、今地域の中で何をしなければいけないのか、そういうような全住民アンケートなどをとって、今やらなければいけないことをみんなで話し合ってます。

私たちの地区でこの当時とったアンケートの中で一番課題があったのが、獣害でした。一番右下の方にありますけどイノシシなどの獣害というものが一番重要度が高くて満足度が低い位置にありました。住民の中で、こういう問題を今までは行政任せにしてきたけれども、行政を頼るだけではなく自分たちで何かできないのかというようなことが、日々、地域の中で話し合われています。

筆甫地区でとったアンケートから見ると、どうしても公民館の事業を引き継いでまちづくりを始めてきましたので、イベントとか生涯学習とか、そういうことが地域の活動の中心になっていたんですが、もうそのあたりというのは結構住民の方々の疲れがたまってきていたり、いや、いつまでもそれをやっても、なかなか地域は変わらないよねという思いがあったので、イベントとか生涯学習とか、そういうことはやり続けるんですが、そこがメインではなく、やはりこれから地域でやらなければいけないことは、例えばイノシシなどの農作物への被害であるとか、実際に地域の中で仕事を作っていくこと、あとはなかなか手がつけられなくなっている農地山林の維持と活用、人づくり、そういうことを地域の中でやっていこうということで、様々なアクションを起こしています。

例えばイノシシの被害であれば、町がちゃんとやってくれないからだとか、猟友会にちゃんと獲って欲しいだとか、そういう話をするだけではなくて、地域の中で自ら箱罠を50基作っ

て、この50基のうち半分の25基を地区内に設置して自らイノシシを獲る、というような活動をしたりしています。

他にも高齢化が63%近くになってきていますので、高齢者の方々の暮らしをちゃんと守るということで、声掛けをしたり、あとはお助け隊といって高齢者の困りごとを解決する仕組みを地域の中で作ったりしています。

他にも農産物の特産品のブランド化にも取り組んだり、あとは平成30年5月20日に、みんなでお金を出し合って、この暮らしを守っていくために地域のお店を作りましょうという形で、「ひっぽのお店 ふでいち」というお店を開店させました。クラウドファンディングなども活用しまして、大体1400万円ぐらい集めて、この事業をスタートさせました。ただ、この事業をスタートさせただけでは、歩いて来ることができる住民の方の買い物は助けられるんですが、歩いて来ることができない住民の方々も支えなければいけないという形で、移動販売なども今地域でやるようにしています。

今、全国の地域運営組織のほとんど、地域づくり協議会のほとんどが任意団体かと思いますが、私たちはこのお店を立ち上げるときに、一般社団法人という法人格を取って、事業の再スタートを切りました。次に出てきた地域の課題として、ガソリンスタンドが後継者不足となり、その事業者が辞めるといった話がありました。このガソリンスタンドがなくなってしまったら地域の中で暮らしていけるのかという話もありましたので、私たちはこのガソリンスタンドの事業承継をして、今はまちづくりセンターの運営と、お店の運営と、ガソリンスタンドの運営をしながら、地域全体の中で雇用を作って、そこで暮らす人々の生活を守りたいというような取り組みをして参りました。

他にも、今日ろんくまさんが後で移住のお話をされるかと思いますが、地域の中で移住の話を進めたり、地域運営組織、まちづくり協議会が自ら農業に取り組んだり、作ったお米でお酒を作ったり、特産品のさらなるブランド化などを地域の中で進めています。私たちの地区は本当に高齢化が進んでいまして、なり手、担い手が少なくなっているんですが、今ここで暮らす住民の方々が自らの暮らしを守るために何でもやってみようということで話し合いをして、アクションを起こしています。

今の私のお話の中では、そこに至るまでの経緯の話にあまり触れておりませんでしたので、これからちょっと10分程度の動画を見ていただいて、私たちの地区のこの10数年間と一緒に振り返っていただければと思います。

それでは動画をお願いします。

～動画再生～

動画の時間をとっていただきありがとうございます。

見ていただいたように、私たちは自分たちでできることは何でも自分たちでチャレンジしようという気持ちで、今地域がどんな状況になっていて、今何が課題で何をしなければいけないのかということ話し合っ、取り組みを進めさせていただいています。そういったことが結局、地域の方々がここに住んでいてよかったなという気持ちに繋がるかと思っていますので、これからもそういう取り組みを続けていきたいと思っています。

それでは、今日はありがとうございました。

**指出**／吉澤さんありがとうございました。

へそ大根美味しそうですね。僕も丸森にお伺いさせていただいたことがあるんですが、素敵な場所だなというのを改めて思い返しています。

改めまして、総務大臣賞を受賞されました、一般社団法人筆甫地区振興連絡協議会のプレゼンテーションでした。ありがとうございました。

続きまして、こちらは全国過疎地域連盟会長賞を受賞された福島県田村市、株式会社ホップジャパンの本間さんからのプレゼンテーションです。本間さんよろしく願いいたします。



### 株式会社ホップジャパン [福島県田村市]

**本間**／福島県の田村市でクラフトビールを作る事業を中心に活動しております、ホップジャパン、本間です。よろしくお願いいたします。

まず田村市といいますのは、福島は大きく三つの地区に分かれていまして、一番内陸の方が会津です、こちらの方に会津がありまして、あと、浜通り、浜の方がありまして、あとは真ん中の地区、中通りがあります。その中通りに郡山がありまして、その近隣になっております。その田村市は5町村が合併してできたところで、中通りで一番海側にありますので、



半分海に近いというようなところ。そして福島原発から20キロ、30キロ圏内ということで、3年間避難区域に指定され、その間全く人がいなかったという地区であります。

私の企業は、2015年に仙台で起業したのですが、ご縁がありまして、福島の方でホップ栽培から原料を作ってビールを作るということで、移住してきました。

このまだ風評被害の残る都路地区でブルワリーを開くということになったのですが、私が来た時には本当にもう、避難指示区域の指定が解除されて帰ってきて、年配の方しか帰ってこないというような状況で、このまま町がなくなってしまうんじゃないかというような、すごく活気のないところでした。そういったこともあり、何とか復興の拠点、きっかけとなるようなという思いもあり、こちらでブルワリーをすることになりました。このブルワリーがある建物は新しく作ったわけではありません。当時の、合併前は都路村と言ったのですが、「グリーンパーク都路」という、東京ドーム1個分ぐらいの土地の中に、その時の産品を体感できる施設ということで、畜産が盛んだったのでその牛肉を食べるバーベキューハウスですか、あとはコミュニティー施設があったんです。この建物を中心にキャンプ場があり、あとはちょっとしたふれ合い牧場、あとは何か市民農園みたいなものがあったんです。

ただ、ものすごい山の中にあるんです。阿武隈高原という標高600メートル以上のところにあり、道もすごく細くて本当に山の中にあっただけで、焼肉ハウスを作っても人が来なくて、1年ぐらいで閉鎖してしまったという、施設ハードを作ってもソフトがないという典型的なパターンでした。そのあと田村市に合併して、その後震災が起こったということで、もう本当にその時は全く人っ子1人来ないようなところでした。

でも施設はあるので、管理費だけはかかる、草刈もしなければいけないしと、一応キャンプ場は細々と運営はしていましたが、年に数客しかこないようなところでした。

管理費ばかりかかって、一銭も生まないというようなところだったんですが、せっかくこのような施設があるので、新しく建てるのではなくて、あるものを利用して、マイナスの資産をプラスに変えようということで、ブルワリーを作ることにしました。使えなかった焼肉ハウス、これもブルワリーが開業した後に、半年後ぐらいに改修してロッジにしました。キャンプ場も、特にハードをいじったわけではないんですがリニューアルして、全部ホップガーデンという名前に統一して、こちらの方は指定管理として運営しました。建物や施設に関しては当社で譲渡を受けて、当社のもので運営しております。そうしますと今まで数客しかこなかったキャンプサイトが、クラフトビールが飲めるキャンプ場として、すごく人気になりまして、今では週末はすぐ埋まってしまう、キャンセル待ちになってしまうほどの人気になっています。

このように、遊休施設を利用することを中心に、既にあった三つの建物から始まったんですが、さらに施設内のいろんなあるものを有効活用しております。

他には、ディスクゴルフという、球技と同じようなフリスビーのスポーツがあります。ディスクゴルフというのは、そのフリスビーを使ったゴルフです。全くゴルフと同じルールをフリスビーでやるんですが、ちゃんと欧米ではプロリーグもあり、世界記録になると300メートルぐらい飛ばすんです。ドライバーとかパターもあって、こういうターゲットがホールがわりについて、そこに入れて18ホールを回る。土地が広いので、18ホールを取れるんです。9ホールぐらいあるところは結構あるんですが、18ホールあるというのはなかなかないらしく、しかも高低差があるというので、珍しいディスクゴルフ場だと一気に有名になって、今では全国大会まで行われるぐらいになっております。

こういう今までパークゴルフ場だったところは、アルティメットというまたディスク（フリスビー）を使ったアメリカンフットボールのようなスポーツに変えたりと、みんなが同じようなことをやっているスポーツをやっても仕方がないので、かといってあんまりマイナーでもというところで、このディスクスポーツというのは、特にディスクゴルフはこれからオリンピックの候補にも挙がっているぐらいで、人気のあるスポーツとしてすごくいいのではないかなと思っております。

あとは麦畑です。ホップはこちらで栽培をしているんですが、あわせて麦畑も作りまして、ここで原料を調達しています。ホップはここだけではなく、この近くに委託農家さんがあって、そこでもしっかり作っております。普通は乾燥した加工ホップしか使えないんですが、自分で作っているんで、その加工しない生のままのホップを使える。ブルワリーの規模としては最大のホップ畑を持っているので、もう好きなだけ生のホップを使えるということで、非常に全国でも珍しい作り方でビールを作っております。あとは、近所のパンを作るのが好きな方が、ベーカリーをここで始めたりされて、それもホップをパンに使って、すごく独特の風味のある良いものになっております。

このように6次化展開しまして、そうすると自然発生的にマルシェが出てきたりして、最初は近所の方が集まって出店などをやっていたのがだんだん広く大きくなりまして、今までは定期的に開催して、一番の集大成としてあぶくまオクトーバーフェストというイベントが開かれるようになりました。これは今年で2年目になりまして、1日800人ぐらい来られるという、そういうイベントも行っております。

あぶくまオクトーバーフェストのテーマは、乾杯を地球にということで、オクトーバーの収穫のときに、その恵みをみんな感謝し合おうという意味で、オクトーバーフェストをやっ

## 第2分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会

ております。あえてビアフェスではなくて、オクトーパーフェストです。すべて天然です。麦もホップも、太陽の恵み、地球の恵みで採れたものしか使っていません。それをみんなで乾杯しながら、地球に感謝しようと、そういう意味で、オクトーパーフェスト、乾杯を地球に、と言っています。

当社の事業の理念としまして、1次産業の原料から2次産業でビールを作り、それを楽しんで6次化する。普通は捨てられる麦のかすなどもまた麦畑やホップ畑に肥料として戻したり、近くの牧場の家畜のえさになるということで無駄なく使う。そこで、0次産業化という名前をつけて、これらが循環する姿、これを会社の理念にしております。

会社の理念として、この循環というものに至った経緯なんですけど、アメリカに以前いたことがありまして、そのときに知ったそのビール文化です。日本ではラガービールのごくごく飲むビールしか知らなかったんですが、アメリカに行ったときに、嗜好品としてワインのように楽しむ香り、味わい豊かなビールを知って本当においしいと思ったんです。さらに、その味だけではなくて、平日であっても明日山登りに行こうと言うとみんなでハイキングに行ったりして、朝5時ぐらいに出社して10時ぐらいに仕事を終わらせて。人生を楽しむためのライフスタイルができているというか、仕事オンリーではない。お昼ごろ山に登って夕方に戻ってきたら、その近くのブルワリーで必ず締めるみたいな、そういうライフスタイルが、広い意味でのビール文化がすごくいいなあとと思ひまして、日本でもこういったことをやりたいと思ったのがきっかけです。また原体験として子供の頃から、この環境に対する思いがありました。子供の頃貧乏だったので長屋に住んでいて、井戸水を汲んで育ったんです。私の日課で水をくむ、という仕事がありまして、こういう今ではあんまり見なくなったポンプで水を出してバケツに汲んで運んでいたの、その水のありがたさとか、当時の水道水はものすごくまずかったの、本当の水のおいしさというのがすごく身に染みてわかっていました。私が小学校か中学校の頃ですかね、インドシナ難民が日本にたくさん来られて、ポルポトの虐殺でカンボジアから難民を日本で受け入れていたんですが、その時のある少女がテレビでインタビューを受けていたのがすごく印象的でした。日本に来て何に一番驚きましたかというインタビューに対して、私は、多分みんなもそうだと思うんですが、やっぱり日本のテクノロジーなどが素晴らしいという答えが返ってくると思っていたんです。そしたらものすごく意外な言葉が出てきて、その少女は、日本って飲める水で顔洗うんだと、それが一番驚いたって言うていたんですね。水ってすごく大事ななということ。ひいては、その水を作っているのは森であり、海であり、その循環で水ができています。このように環境に対する思いがあって、何かそれに関わりたいという

ころがありました。

そこに東日本大震災がありました。私は、この事業をやる前は東北電力にいたんです。たくさん原子力発電所にも、広報部門でお連れしたりして。そういう、なんというか、エネルギーを作るというのが、環境を汚していることでもあるので。そこは本当に、どういものが本当に地球にいいのかという思いが常にあった中でこういう大震災、そして原発事故が起きて、何かもう残りの人生をこう、地球にもっとこう、価値あるものに使いたいなと思ひまして。

この三つがきっかけになり事業を始め、こういうビジネスのモデルができ上がったというのが背景にありました。

今はビールを使ってそれを循環で表現しているんですが、ビールだけではなくていろんなコンテンツを使って循環のテーマパークにしていきたいと思ひしております。その一つとしてまた始めたのが、今まで赤そばを植えていて、すごく綺麗な観賞用だったんですが、それを鑑賞だけで終わらせるのではなくて、養蜂を始めました。ミツバチの蜜を採って、その蜜を使ったミードというお酒が古代からあるんですが、それを作り、観賞に来られた方には今度はそば粉を使ってガレットを出すというような、これも循環のコンテンツにして、いろいろ展開していきたいと思ひています。

私、名前を付けまして、「Local Eco-System Ideal Park」略して「LESIP (レシップ)」という取り組みをやっています。まずこの理念があって、それを発信することによって、いろんな人がそれに共感して集まってくるという。田舎でよくありがちなのが、まず工業団地を作って、どこからでもいいから来てくれと。それでやっとなにか来てくれて、何人雇用しましたという。そういうパターンしかないというのがとてもおかしいと思ひています。どうしてもハードから始まってしまふんですね。

私のブルワリーだって、元々ハードが作られて結局使えなかったものをブルワリーに改修しました。やはり最初に理念があるべきで、理念は設計図だと思うんです。まずその理念を訴えることによって人が集まってきて、それからまたシナジーが生まれる。シリコンバレーが、新しいものを作りたいという人がどんどん集まってきてそれからシナジーが生まれるように、そこに共通の意識がないと。それがあって次のハードが来ると思ひているんです。そういう取り組みを、今回はビールということを核にしていますけど、いろんな過疎地でできるんじゃないかなと思ひしております。

これからとして、農業をそのような循環でさらに展開していきたいなと思ひしております。麦のカスを堆肥にして野菜を作り、その野菜で今度はカフェを開くとか。また、ヤギを飼って草を刈ってもらいそのミルクからチーズを作る、現地で採れた小麦を使ってピザを作るとか。そういうことで循環のコン

テンツを増やしていきたいというのが夢です。将来的にはこのような感じになればいいなと思っております。

当社のビールですが、陰陽五行になっております。こういうトレンドのビールを作りましたので、おしゃれなこんなラベルで今回出します、などというように、毎回毎回思いつきで作るのではなくて、まずテーマを作って、それをビールのスタイルにしています。循環の根本要素である陰陽五行から、コンセプトを作る。陰、月があって太陽がある。それによって木が育ち、火で燃えて土になり、鉱物ができて、水がそれを循環している。それぞれのエレメントに合うようにビールのスタイルを結びつけております。一つ一つどれも生ホップを使い、味が个性的ですので、ぜひ機会があれば、飲んでいただきたいなと思っております。

最後に、理念という部分について。私は、最初はとんとん拍子で事業はうまくいったんですが、途中、すごく資金に困ったりして非常に大変な思いをしました。もう死ぬしかないなっていうふうにも思ったこともあります。でも、開き直って自分のやりたいことの想い、理念をどんどん伝えることで、いい人がどんどん集まってくるようになりました。それで、まず理念を、理想を語るというのは大事だなと思っております。そこで最後に、究極的にこういう理想をやりたいというのを、こちらに書きました。「我々は地球人だ」ということで、こういう過疎地、大自然の中にある過疎地で大使館を作って、地球人のパスポートを発行するという、そういうムーブメントを作りたいんです。このパスポートの取得条件はたった一つです。この地球にあるすべてのものを自分の家と庭、そして家族として生活します。それだけがこの条件なんです。いろいろSDGsとかありますが、欧米の考え方だと思うんです。今のSDGsって、何か難しいことを言っている、日本人としてなかなかちょっとわかりづらい部分があります。でも、SDGsって別にこれでいいんじゃないの、これができれば、みんな幸せに戦争もなく暮らせるんじゃないの。そういうことを発信できるのは、過疎地田舎からじゃないかなと思っております。最後に、この想いを記したところを読み上げて終わりにしたいと思います。

水を使う時、ペーパータオルを使う時、思い出してください、地球人であることを。

食事をする時、ゴミを捨てる時、思い出してください、地球人であることを。

本当に必要ですか?適量ですか?

花々を見て、森を抜ける風を吸って、鳥の声を聞いて、感じてください、地球人であることを。

朝日を浴びながら深呼吸する時、真っ赤な夕焼けを見る時、満天の星空を見る時、楽しんでください、地球人であることを。

裸足で大地に立って感謝してください、地球に。

家族も街も国も、男性も女性も、肌の色も、区別する必要はない、だって地球人だもの。

すべてを愛しています。

我々は地球人だ。

以上で終わります、ありがとうございます。

**指出**／本間さん、熱い想いをありがとうございました。僕たちは地球人ですよ。

地域に関わりたい若い皆さんを、東京からホップジャンプの本間さんを訪ねて一緒にさせていただいたことが今年の夏にあったんですが、もうみんな本間さんがやっているこのビジョンを見てワクワクしてるんですよ。きっと若い人のセンチメントの中には、この地球人とかアースセンターみたいな感覚がすごくあるんじゃないのかなというのを感じました。ありがとうございます。温かい拍手ありがとうございます。会場で盛り上げていきましょうね。

では次は、総務大臣賞を受賞された新潟県長岡市山古志住民会議/ネオ山古志村山古志DAOの竹内さんです、竹内さんよろしく願いいたします。



#### 山古志住民会議／ネオ山古志村(山古志DAO) [新潟県長岡市]

**竹内**／山古志住民会議の竹内です。どうぞよろしく申し上げます。

まず最初に私の自己紹介からと思います。昨日、山古志村から下山してきました、山古志住民会議という任意団体の代表をさせていただいているんですが、私、実はよそ者です。山古志村出身でもありませんし、今も実は山古志に住んでいません。19年前の中越大地震によって被災された住民の方々を支援する、災害ボランティアセンターの職員としてご一緒にさせていただいて、今、山古志17年生になります。本当にこの17年間山古志の方々に育てていただいて、山古志住



## 第2分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会

民会議という、いかにも住民の方々がもう総力戦で関わっておられる団体の代表を、この私にさせてくださっております。今日は住民の方々はこの会場にいらっやっていないんですが、住民の方々の思いを胸にお話できたらなと思います、よろしくお願いします。

まずは、ちょっと山古志のご紹介を冒頭でさせていただきます。富山県の隣の県、新潟県のちょうど真ん中に位置するザ・中山間地域です。富山県も雪が降ると思うんですが、わが山古志は世界有数の豪雪地帯でして、例年3メートルから4メートルの雪が降ります。平成の大合併で長岡市に編入合併をして、今は長岡市の山古志地域として存在をしています。

集落は、14集落あるんですが、少ない集落ですと、ひとつの集落でも5世帯あるかないかという規模の集落から、100世帯規模の集落もあるような感じです。人口が、今812人というふうにかかせていただいているんですが、今月ですと760人台にまで減少しております。なので高齢化率も56%を超えるような状態です。

主な地域資源としましては、山古志が発祥の地ということで愛好家の方も国内外問わずいらっやるんですが、この錦鯉と、あとは牛の角突きという、こういう独特な文化があります。この牛の角突きの牛たちが、起伏の激しい山古志の田んぼであったり、畑であったりというのを耕していたんですが、錦鯉が育つ池と、牛たちが耕していた田んぼ、これら棚田・棚池の景観が、日本農業遺産に認定されました。この三つの主な地域資源が山古志にあります。

この山古志ですが、今から19年前の2004年10月23日に、中越地震という地震が起きました。壊滅的な被害を受けまして、3年半にわたる全村避難をしています。この地震の約半年後ですが、平成の大合併で長岡市に市町村合併をすることで、この時点で、帰ろう山古志へ、帰りたい、自分たちのふるさとへと思っていた村が、自治体として消滅してしまいます。この震災と市町村合併は、非常に大きな出来事だったんですが、これを契機に、逆に住民主体の地域づくりの機運は高まります。私が今代表をさせていただいている山古志住民会議も、このタイミングで立ち上がりました。自分たちの村は、自分たちの地域は、自分たちで未来を描いて作ってこうということで、設立をしています。

また、震災当時2200人いました山古志住民の方々なんですが、約8割の方が3年半の避難生活を経て山古志に帰ってきました。その後、10数年の時を経て、現在は800人を切る状態になっています。ここまで住民が減ってきてしまいますと、いろんな課題が山積するようになりました。

2年前から唯一山古志にありました保育園が閉鎖と書かせていただいておりますが、休園をしております。その他、小中学校の複式化であったりとか、診療所の機能の縮小、公共交通

の撤退、そしてまた14個ある集落がそれぞれ集落同士で力を合わせて行っていた行事であったりとか、みんなで力を合わせて管理していた山の管理であったりとか、共助体制が弱体化しているなど、本当に、課題が山積しているような状態です。

このような中でも、地震以降、本当に人数は減ってはいるんですが、山古志に帰ってきて、自分たちの村をもう1回作り直そう、新しい山古志村を作ろうと、住民の方々がそれぞれ挑戦をする中で、住民の方だけではなく、私みたいなよそ者もしかりで、学生の方々もしかり、民間企業の方々もしかり、本当に多くの方が一緒になって、トライアンドエラーを繰り返してきていただきました。

このような山積する課題、本当に課題ばっかりの山古志ではあったんですが、ふと立ちどまってみると、地震以降、住民の山古志に帰りたいという思いであったりとか、私たちは山古志で生きて山古志で死んでいきたいんだという思いに共感していただいた方は本当にたくさんいらっやいました。数千人ですかね、学生ボランティアだけでも延べ6000人の方々が共感して下さって、住民の方とともに挑戦をして下さったんですが、このように山古志に共感する方々、地震以降に共感していただいた方々を、住民と同様の仲間として地域づくりの主体者として認めたいよね、その仲間と一緒にこれからの山古志を作っていきたいよね、ということで始めたのが、NFTを活用したプロジェクトになります。

このNFTという技術ですが、私自身、NFTやシステムのプロでもないですし、山古志の共感者を、共感者として認めるシステムとして、NFTをツールとして活用させていただいたというものです。このNFTを接点として共同体を形成して、山古志に共感する方々と、リアルに山古志に住む方々とで、まるで1個の国のような、独立した国のようなコミュニティを作って自治までできれば、山古志をずっと存続させられるのではないかと、という仮説を立てて、NFTを発行しております。私たちの発行したNFTなんですが、山古志が発祥の地の、私たちのアイデンティティでもある錦鯉をシンボルにしたこのデジタルアートと、仲間の証の電子住民票という概念を作りまして、紐づけてあります。現在までこの三種類の錦鯉をモチーフにしたNFTを発行しております。

仕組みとしてはまず、このNFTという山古志の仲間の証を接点に、このNFTというデジタルアート兼電子住民票を購入していただいた方々を、私たちはデジタル村民とお呼びしています。この方々のマンパワーであったり能力であったり資金と、私達山古志リアルが持ち合わせる精神性であったり地域資源をかけ合わせた、国のようなコミュニティを作って、山古志を存続させていくという仕組みです。

発行は、今から約2年前の2021年12月中旬です。現在まで



約3000弱のNFT、山古志の仲間の証であるNFTを発行しています。このNFTをお持ちいただいているデジタル村民の方が約1600人いらっしゃいます。この1600人の内訳ですが、日本国内の方が約8割ぐらい、2割の方は海外の方です。この1600人のデジタル村民の方と一緒に、リアル住民の方と日々日々、Discordというチャットツールを使って、本来であれば、山古志の中の協議会であったりとか、いろんな地域づくり団体の中で協議、相談している話題なども、デジタル村民のこの1600人の方と一緒に考えて、相談し合っています。

発行したのが約2年前なんですけど、これまで3回ほど販売を行っています。1回目のセールスの約半分近くの40%の方と、2回目のセールスの4分の1の方が、何と初めてこのNFTを購入してくださった方々でした。当初はこのNFTというもの、私自身もそのプロでもないですし、2021年の段階ですと、なかなか国内の中でもNFTというワードを知っていらっしゃる方は本当に少なかったんです。なのでどちらかというと海外に向けて発信をしていたところもあるんですが、それでも国内の方が、地域づくり×NFTってなにが始まるんだとか、もしかしたらこのNFTというデジタル技術を活用して自分の地域も何か元気にできるんじゃないか、ということで、いろんなハードルを超えなければこのNFTというのはなかなかすぐには買えなかったりしたんですが、そのいろんなハードルを超えて買ってくださった方々が、第1弾セールスでは半分近く、第2弾セールスですと4分の1の方々が、共感して購入をしてくださいました。

私たちのNFTが持つユーティリティですが、先ほどお伝えしてしまいましたが、Discordというチャットツールを使って毎日コミュニケーションをしており、このコミュニティへのアクセス権があります。さらに、アイデンティティの象徴として、そして投票権としても機能します。また、デジタル資産としての意味合いも持ち合わせています。

発行以降の具体的な取り組みとしては、発行から約1ヶ月後になるんですが、デジタル村民の方から提案が一つありました。リアルな住民の方と一緒に、よりこのプロジェクトを推進していきたい、もし希望する方がいらっしゃれば、住民の方には無償でこのNFTを配布したらどうか、という提案がありました。それはいいねと、他のデジタル村民の方もおっしゃってくださったので、じゃあ投票をして、賛否を問ってみましょうということで行ったのが、リアル山古志住民にNFTを無償配布するかどうかの投票です。賛成がなんと100%、反対が0%ということで、実は賛成が100%というのは予想していませんでしたが、この胸の熱くなるような結果を経まして、地域のコミュニティセンターみたいな拠点があり、そこに私は事務所を構えさせていただいているんですが、少しずつ、地

域のお父さんお母さんに集まっていただいて、NFTを取り扱う仮想通貨のウォレットを開設したり、また、Discordというチャットツールをインストールして、コミュニケーションが取れるようにスマホにアプリを入れたりして、住民の方にもNFTを徐々に徐々にをお持ちいただいております。

そのような中で、デジタル住民とリアル住民とでともに挑んだのが、山古志デジタル村民総選挙です。無償配布の約1ヶ月後に実施したイベントになります。これは、Nishikigoi NFTの売り上げを使う権利は、山古志住民だけではなくて、仲間であるデジタル村民の皆さんにもありますよ、ということをお伝えしたくて行ったイベントです。

簡単に言いますと、山古志存続のためのアクションプランをデジタル村民の方から公募しまして、それをNFTを使って人気投票し、上位1位から4位までを決めて、Nishikigoi NFTの売上をプロジェクト予算として付与していくという取り組みです。結果、12件の応募がありました。その中から上位1位から4位までを人気投票し、プロジェクト予算として付与しました。その選ばれたプロジェクトが、2022年から今日に至るまでひたすらずっと動いているような感じですよ。

こちらのプロジェクトで選ばれた4つのプランを通して、実際に山古志に足を運んでくださるデジタル村民の方々も多くなりました。一番最初は、そうですね、2年前に当初NFTを発行した約2週間後ぐらいに、「僕デジタル村民なんで山古志に帰省しまーす」とおっしゃったデジタル村民帰省第1号の方が、本当に山古志には初めて来られるんですけど、そしてまた出身地でもないし住んでもおられないんですが、帰省しまーすと言って山古志に来られたことがあったんです。それをきっかけとして、デジタル村民の方が山古志に来ることを皆さん帰省と言っています。ふるさとに帰るように、自分の実家に帰るように、帰省しますと言って山古志に来てくださっています。ちょっとコロナも落ち着いたということもありまして、延べ300から400名ぐらいの方々が、山古志を訪れたり、山古志に滞在をしてくださったりしております。

また、リアルな山古志に来てくださって交流も進めてくださっているんですが、日々、このDiscordを使ったコミュニティ運営もしております。これは、大きなアパートの中にテーマ別のお部屋があるみたいなイメージなんですけど、「おはよう」だけをただただ言い合うお部屋があったり、雑談をするお部屋があったり、また、中華圏の方が集うお部屋があったり、海外の方が集うお部屋があったりなど、テーマ別で、コミュニケーションをしております。

このDiscordの中で使ってる言語は、今は日本語と英語と中国語なんですけど、このコミュニティのモデレーションといいますが、管理人おばちゃん、おせっかいおばちゃんをして

## 第2分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会

いるのが、私、竹内です。ですので、「この部屋はちょっと何か小競り合っているなあ」とか、「ここの部屋はちょっとなんか元気ないわ」と思うと、「はいはいちょっと元気ないけどこっちの部屋行ってみて」などというようにおせっかいおばちゃんとして、日々日々コミュニケーションの促進をしております。

今後についてですが、私たちの山古志住民会議、実はまだ任意団体です。このリアル山古志住民とデジタル村民の共感コミュニティ、まるで国のような共感コミュニティをより加速させて、より元気に楽しくさせていくためには、やはり組織化を、法人化をせねばならぬという話を今しています。そして、早ければ年内中に組織化ができるかなと思っているんですが、山古志住民と、共感いただいているデジタル村民の方々がより活発にアクションできるように、法人化を進めて、より一層挑戦をしていきたいと思っています。私からの発表は以上でした。ご清聴ありがとうございました。

**指出**／竹内さんありがとうございました。

僭越ながら、今回の優良事例の審査員の代表として私が山古志地域にはお伺いさせていただきました。感じたのは、未来は突然現れるわけではないなということです。みんな未来を作ろうと思って未来ばかり向いているけれども、それまでに積み重ねてきたものが、後ろから軽やかにこう前に行くんですね。だから、山古志のこの20年近い、中越地震から綿々と繋がる応援している方々であったり、山古志の中の皆さんの思いが、このDAOであったりNFTという形をとったコミュニティになっているんだなというふうに思いました。

お土産で買って来た神楽南蛮がめっちゃめっちゃ美味しかったです。また買おうと思います。

山古志住民会議 / ネオ山古志村山古志 DAO の竹内さんでした。ありがとうございました。

では最後のプレゼンテーションになりますが、地元氷見市より、全国過疎地域連盟会長賞を受賞されました富山県氷見市、論田自治会及び熊無自治会、ろんくま移住促進委員会の伊東さんより、発表いただきます。

伊東さんよろしく願いいたします。

**論田自治会及び熊無自治会、  
ろんくま移住促進委員会  
【富山県氷見市】**

**伊東**／ろんくま移住促進委員会で事務局をやっています伊東です。

今日は地元からもたくさんの方にお越しいただきまして、あ

りがとうございます。

ろんくまの取り組みについて紹介をさせていただきます。

今日私からお話しすることは4点ありまして、まずろんくまについてどんな地域なのかということをご紹介しまして、これまで取り組んできたこと、それからその原動力となっているようなこと、最後に今後はどこへ向かおうとしているのか、ということについてご紹介したいと思います。

移住促進に向けた取り組みは、令和3年から始めているんですが、まだ2年弱ということで、成果は正直まだ出ていないような状況にあります。まだまだ始まったばかりです。

ただ、この間、いろんな取り組みをやってきて、少し手応えといますか、他の地域にもちょっと参考になるのではないかなということが幾つか思い当たりますので、それをちょっとご紹介したいと思います。

まず、簡単に私の自己紹介ですが、もともと東京の出身で氷見には10年前に移住してきました。母親が氷見市の論田地区の出身でして、小さい頃からよく夏休みなんかには里帰りといいますが、遊びに行くと田んぼ道で虫をとったりとか、そういう自然体験がもうずっと心に残るんですね。それで、大人になっていつか地方に行きたいという思いから、転職を機に氷見市の方に移住しました。今は氷見市役所の職員をやっているんですが、この活動については市の職員としてではなく、地元住民として活動させていただいています。

ではろんくまについてということで、まず氷見市は、能登半島のつけ根、富山県の西部に位置します。この氷見市の中でも西部、石川県との県境に、論田地区と熊無地区という二つの地区があります。頭の文字をとって「ろんくま」というふうに呼んでいます。約200世帯、人口600人で高齢化率は50%ほどとなっています。こちらのろんくまを上空からドローンで撮影した景観なんですけど、ご覧の通り本当に景色の綺麗なところでして、私の家の前からも、今の時期は秋の澄んだ空気の下、収穫の終わった棚田がこう広がってまして、その向こうに氷見の街が見えて、その向こうに富山湾が見えまして、さらにその向こうに立山連峰があって、そこから朝陽が昇ってくるというような、もう息をのむような美しい景観があります。この景観の美しさというのがろんくまの特徴の一つです。

もう一つは、意外に交通の便がいいんじゃないかということです。論田熊無は富山県と石川県の県境にありますので、生活圏が両県に跨っているんです。どちらのスーパーに行くにも車で約20分。新幹線のある新高岡までは40分。金沢まで約1時間ということで、通常過疎地域でスーパーまで車で20分というのは、他の方の話を聞くと、こんな地域はあんまりないんじゃないかと思っています。これだけ自然が豊かで街へのアクセスがいいというのは、地元の方はあんまり意識していないかもしれないですが、実は外から見ると結構魅力なんじゃ

ないかということで、まちと自然とのほどよい距離感というの  
も、この地域の特徴の一つかなと思います。

こちらは人口の推移をグラフにしたものです。平成27年の国  
勢調査のデータを使って、これまでの論田熊無の人口の推移  
と、これからどうなっていくのかというのを予測したグラフに  
なります。現在が約600人の人口で、20年前は900人でした。  
それが15年後、300人にまで落ちるんじゃないかという  
予測で、これから読み取れるのは、20年で300人減っていた  
のが、15年で300人減ってしまう、人口減少が加速してるん  
だということが読み取れます。

こちらは人口ピラミッドです。上の方が高齢者で下の方に行  
くほど、若い世代になります。左側2020年、右側2040年な  
んですが、20年後、このピラミッドが全体的に少なくなります。  
特にここで注目したいのが30歳未満の若い世代です。左  
側が男性で右側が女性なんですけど、女性が少ないんです。  
女性がほとんどいなくなってしまう。これは何かというと、女  
性が少なくなるということは子供が少なくなるということで、  
20年後には小学生がほぼゼロになってしまうんじゃないかとい  
うことがこの予測から見えてきました。

これは世帯数です。世帯数も右肩下がりです。ここで注目し  
たいのは、世帯数は減っていくんですが、高齢者だけの世帯  
の割合というのは、実は増えていきます。約20年後には4割  
が高齢者単独・夫婦だけの世帯になっていくんじゃないかとい  
うことが予測できます。世帯数が減るといことは、空き家  
が増えていきます。この空き家をどう活用していくのかとい  
うのも、課題です。

こういう人口減少に伴う課題に対して、どう立ち向かっていけ  
ばいいのかということで、ろんくまは、令和3年に富山県の移  
住者受け入れモデル地域というのに認定されまして、実行委  
員会を立ち上げました。その中でいろいろ話し合いを重ねて、  
他の地域の事例なんかをもたくさん勉強しまして、1年かけて  
計画を作りました。ろんくま移住計画です。10年後、こんな姿  
を目指します!というのが三つあって、一つ目が、子ども達の  
笑い声が響く村にしよう。二つ目が、いろんな人が集まって交  
流する村にしていこう。そして、人は減っても、1人あたりの負  
担が少ない村にしていましよう、という三つの目標を立てまし  
た。

そのためにはどんな取り組みをするかということで、情報発  
信であったり、自治会の体制など今まで当たり前だったこと  
を見直したり、それから、地域の中と外をつなぐ取り組み、ま  
た、今すでにやっている取り組みをもっとレベルアップ、魅力  
的にしていこうと、こういった目標を掲げました。

これはちょっと細かいんですが、今私が言ったことを少し体系  
化したものです。

今言ったようなことは、多分皆さんの他の地域でもこういっ

た計画を作ろうと思うと、似たような計画になるのではない  
かと思うんです。たどり着く結論は、多分同じというか。ここで  
大事なのは、こうして見える化するということではないかなと  
思います。何かいろいろイベントをやっているけど、このイベン  
トって何のためにやっているんだろうとか、その目的が見えな  
いと、なかなかモチベーションが上がらなかったり、長続きし  
なかったりという中で、このイベントの先にはこういった目標  
があるんだよというのを見える化していく。この見える化っ  
てあとでまた言いますがとても大事なことじゃないかなと私  
は思います。

取り組みの一つが情報発信です。左下にあるのがインスタグ  
ラムで、右下がFacebookです。ここで皆さんにスマートフォ  
ンを出していただいて、ぜひこのQRコードを読んでくださ  
い、よければフォローしてください、いいねしてください  
をお願いしようかなと思ったんですが、多分スクリーンが小さ  
くてちょっと読み取れないかな。作戦失敗だなと思いつなが  
見ているんですが、いけますか。はい。いける方はぜひお願  
いします。

インターネットで「ろんくま」というふうにひらがなで検索して  
いただくとホームページなんかも出てきます。ホームページ  
にはプロモーションビデオも出ていますのでぜひご覧いただ  
きたいのと、インスタグラムは地元の女子大生が、運用した  
いですというふうに言ってくださって、どんどん発信してい  
ただいてまして、もう若い子ならではのセンスで、インスタグ  
ラマーもフォロワーも若い方が多いなという印象があり  
ます。そういう媒体ごとに対象となるターゲットも想定しな  
がらやっています。

他に情報発信として、マスコットキャラクターでの取り組みが  
あります。最初、熊無自治会さんがマスコットキャラクターを  
作ってるというのを聞いて、ちょっと嫌な予感がしたんです。  
マスコットやゆるキャラで、結構失敗してるどころってあるん  
じゃないかなと。大丈夫かなと思ったんですが、できたのはこ  
れです。どうでしょう。結構かわいくないですか。くまなくま  
タローとろんくまチャンです。左側がくまなくまタローで、  
ちょっと細かいエピソードも設定されているんですが、くま  
タローが背負ってるのは、地元の特産の藤箕というものです。  
箕ですね。ろんくまチャンは、この下げてるポーチの中に特産  
品の草餅が入ってます。草餅食べ過ぎてちょっと緑色になっ  
たという設定です。すごい細かいです。他にもいろいろあり  
ます。このマスコットの、テーマソングまでおじさんたちが作ら  
れまして、それを地元の小1年生に歌ってもらってCD化し  
まして、それを父兄の方に配って、そこからまたこれかわいい  
ねというようなPRに繋がったりですね。情報発信でこういうや  
り方もあるんだなと、すごく私も勉強になりました。

続いてはくまなくまウォークです。これは毎年春に行われている



## 第2分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会

ウォーキングイベントなんです、桜の季節、集落の中には色とりどりの花が咲きまして、もう本当に綺麗です。深呼吸したくなるような美しい景色の中を、気持ちのいいウォーキングで回りながら、地元が指定した文化財の解説を聞きながら歩くんですが、解説される方が熊無の徳光さんと呼ばれるぐらいトークが非常に面白くて、参加される方たちもそのトークを大変楽しみに、リピーターの方もいるということです。これは予約受け付け開始からもうすぐに埋まってしまう大人気イベントとなっていて、皆さんも、もし機会があればご参加いただければと思います。

続きましてお休み処くまなしです。これは石川県との県境の方にある農産物の直売所なんです、ここで、毎年秋の時期に味覚祭をやっています。「みんなで収穫を、感謝する、熊無、最高の、イベント、味覚祭」ということで、もう、まさにこのとおり食のイベントです。今度11月の初旬にありますので、もしお近くにお立ち寄りの方はぜひお越しいただければと思います。

続きましては伝承料理の取り組みです。これは、地元で昔から伝わる伝承料理を次の世代につなげていこうというような取り組みです。写真は少し見づらいかもしいませんが、煮物だったり、むかごご飯ですとか、地元の食材を使って作っています。ちょっと変わったところでは、くさぎの打ち豆の煮物というのがあるんですが、くさぎって皆さん何かわかりますか。あんまり背の高くない木で、ちょっとスピード型の葉っぱをしているんですが、葉っぱを揉むとちょっと臭いというか、人によってはピーナッツバターの香りっていうんですが、それとお豆をちょっと甘く煮た煮物で、おいしいんですこれが。私もここに来て初めて食べたんですが、この地域ならではの地元の食材を使った伝承料理で、これは絶やしてはいけないということで、先ほどのくまなしウォークなどで出されます。

続きまして藤箕です。これは国の重要無形文化財に指定されている農作業用の箕なんです。藤蔓の中の繊維ですとか竹を編み込んで作ったもので、昔は加賀藩の時代に、論田熊無の箕というのは大変質がいいということで一大産地となりました。それが時代の変遷とともに、需要が減って、作り手が減少していく中で、何とかこの技術を伝承していきたいということで、藤箕伝承の館というのを整備して、藤箕作り教室が行われています。右下は、今年の夏に、相模女子大学さんと、東京農業大学さんがインターンシップでこられまして、その時に藤箕づくり体験をした、その写真です。

こういう大学連携というのも結構やっています、他に富山大学の芸術文化学部さんとも一緒にいろいろやっていますが、竹林伐採ですとか、稲刈り体験ですとか、地元の方からすると何気ない日常作業というのが、学生さんからすると、もう本当に特別な体験になるということで大変喜ばれていま

す。それから、外から人が来る、若い人が来ることで、地元の方たちもそれを受けて、刺激を受けるきっかけになっているのかなと思います。

続きまして草餅の取り組みです。これは、約20年ほど前に地元のお母さんたちが立ち上げた事業で、もう高齢ということで今年の春に引退したいという話があった中で、この草餅を何とか継承していきたい、つなげていきたいということで、次の世代の方達がこの春に事業継承しました。この草餅というのは結構重要な役割を担っていて。この草餅のお餅、もち米ですね、これを育てるために棚田が耕作放棄地にならずに、集落の景観が維持されています。それからヨモギも、地元のおばあちゃんたちがおしゃべりしながらちょっと摘んで、ちょっとしたお小遣い稼ぎになるような、そんな地元農業の中心にあるような位置付けです。これを何とか残していきたいということで今、取り組みが行われています。

続きまして、茶論です。これ、すごい取り組みなんです、毎月5のつく日。5日、15日、25日に行われています。おじいちゃんおばあちゃんがこの日に集まって、ここで、仏教講話を聞いたり、健康体操をやったり、脳トレゲームをやったりするんですが、すごいのは、市から補助を一切受けなくて、5年以上ボランティアで続けてるんです。これってすごいことだと思っています。どうしてこんな長く続けられるんだろうと、行ってみるとわかるんですが、もう皆さんが本当に楽しそうにやっています。笑い声に溢れていて、運営している方たちにも聞いてみると、楽しいからやってるんやちやと。これ、大事だと思うんですね。義務感とか、危機感とか、そういったものも大事なんです、楽しいからこそ続けられるというのは、もう本当に学ぶところが多いのではないかなと思いました。

続いては集落の教科書です。これは全国で取り組まれているもので、ろんくまでも策定をしました。他の地域では、外から来る人たちに対しての地域のルールブックといいますが、この地域はこんな地域だよというのを知って欲しいという、そういう意味合いで作られることが多いようなんですが、私たちはやってみて、これは自分たちの地域を一步引いて客観的に見ることで、次の改善につなげていくための一つのステップなのではないかなと思いました。例えば、この教科書を作る過程で、全住民対象のアンケートをとりました。現在は、回覧板を班長さんが紙で回覧しているんですが、そういった一つ一つの負担を減らすために、電子回覧板を導入できないかということを考えて、皆さんがスマートフォンをどれぐらい持っているのかを1回調査してみたんです。そうすると、若い世代はやっぱり皆さん多くの方が持っていまするんですが、70代ぐらいで半々ぐらいになり、そこから逆転していく。そういう中で、一斉に全員に電子回覧板というのは無理だなということがわかりました。ただ、60代以下の壮年会ですとか

若い世代では、LINEなんかを積極的に使うことで、運営の省力化に繋がるんじゃないかなというのがわかりました。それから若い方たち、先ほどの女性ですとか、そういった方達のまちづくりへの参加ですね、意思決定の場への参加を促す上でも、こういったものって大事なんじゃないかなと思っていて、ろんくまの公式LINEも立ち上げています。これは他のInstagramなんかと違っていて、完全に地元向けの情報発信ツールです。Googleカレンダーを使って公民館の行事予定を共有したり、あとは回覧板も電子回覧板で見られるようになってます。若い方たちが日中仕事をしていて不在の中で、家にいる年配の方が回覧板をまわしてしまって内容を見ることができないとか、よくデジタルデバイドと言われますけど、何かその逆みたいなものもあるんじゃないかなと思うところがあり、若い方たちの参加を促していく上でも、やっぱりこういうデジタル技術というものはどんどん取り入れていったほうがいいんじゃないかなと思います。

今日何回か出てきたんですが、見える化ですね、小さな成功体験を積み重ねて、見える化する、お祝いするという、これは大事なかなと思います。例えばこの県広報とやまにろんくまの取り組みが出ましたという時に、若い方なんか職場で上司の方とか周りの方から、「ろんくま出てたね、頑張ってるね」、みたいに声をかけられたら、やっぱり嬉しいんですね。そういうのが、地域への誇りとか愛着心に繋がるんじゃないかなと思います。積極的にどんどん見える化していくというのは大事なかなと思います。

それから、目的地に早く着きたいなら1人でやればいいんですが、より遠くまで行きたいのであれば、やっぱりみんなで行って行く必要があるのかなと思います。これは正直私たちもまだまだできていないところがあるかなと思っていて、まだ一部の人だけでやっているじゃないかというふうに言われることもあるんです。ただ、こういう思いを持ってやっているという、それだけで大分違うと思うんです。本当に私たちは遠くまで行きたいので、できるだけ多くの方に参加して欲しいなというふうに考えています。

それからもう一つ。みんなが一つになれる文化を大切にということで、氷見は獅子舞が非常に盛んなんですが、特にろんくまは獅子舞に熱心な地域です。毎年秋に、夜、太鼓の音とともに青年団が集まってきて、練習を重ねるんですが、仕事の関係でどうしても外に出ていった若い方たちも多いんです。多いんですけど、祭りの時期に休みを取ってまで練習に来たりとか、それぐらいみんなすごく好きなんですね。青年団のお子さんたちも来て、ちょっとした子供の遊び場みたいにもなっています。また、青年団を指導するOBの方たちが来たり、笛を吹く女の子たちが練習に来たりということで、多世代交流の場にもなっています。

人口減少が進む中で、私たちがやっていくべきこととして思うのは、どんどん見える化して、自分たちの足元にある大切なもの、資源というものは何なのか、残していきたいものは何なのかということ、絞り込んでいくというか、焦点を当てていく、そういうことが必要なのかなというふうに思います。これからどこに向かおうとしているのかということで、来年度の宿泊体験交流施設の整備に向けて、今検討を進めているところです。これができれば、地域の外から人が訪れて、地域の方たちと交流して、さらに好循環が生まれるというような、そんな状況を目指していきたいなと思っています。

そして、ねこ「ろん」で、「くま」なく歩いて、住んでみて、ということで、ろんくまの取り組みをさらに進化させていければと思います。

ご清聴ありがとうございました。

**指出**／伊東さんありがとうございました。

とてもやさしい思いに溢れているプレゼンテーションであり、たくさんプロジェクトがあるなと思いました。論田熊無にお住まいの皆さんのやさしいお気持ちがたくさん現れている感じがしました。ありがとうございました。

ここから意見交換をしたいと思っていたんですが、もうそろそろ時間です。あと3分しかありませんので、皆さんそれぞれ思いを一言ずつ言っていただけたらと思います。

誰から行きますかね。吉澤さんが行きましょか。お願いします。

**吉澤**／本日はありがとうございました。私達の地区は人口が減って中で、とにかくそこに住む住民一人一人がいかにか主体性を持って地域に関わっていくのかということのを大事にしてきました。そこで暮らす人たちは僕は結構戦う人って言うんですけど、地域の人みんなが自分でやれることをやっていくという地域をこれからも作ってきたいなというふうに思っています。

今回は本当にありがとうございました。

**指出**／ありがとうございました。

では本間さんお願いします。

**本間**／私たちは民間なので、民間という立場でいろいろ背負っているものもあり、地域との取り組み方はちょっと違った観点があるのかなと思っています。ただ、そのテーマというか、やりたいことには変わらないので、このプロセスというものを見せることによって、物の大切さとかありがたさを知ってもらいたいと、そういうシンプルな思いでやっております。何か機会がありましたらぜひ福島の田舎なんですが、ブルワ

## 第2分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会

リーに、ロッジもキャンプ場もあるので遊びに来ていただければと思っています。よろしくお願いします。

**指出**／ありがとうございます。  
では竹内さん、お願いします。

**竹内**／今日は本当にありがとうございました。  
私以外の素敵なお三方の発表を聞いて、もうすぐ行きたくなりましたし、私自身も山古志地域に関わってはいるんですけども、こうやって全国各地で、持ち場立場や地域は違うけれども、何かそれぞれのやり方で調整をされている、なんか同士だなみたいなことを勝手に感じた、すごくうれしかった2日間でした。  
もしよろしければ、山古志も仲間かなとか、同士なのかなと思ってくださる方がいらっしゃるようでしたら、ぜひ遊びに来てください。  
どうもありがとうございました。

**指出**／ありがとうございました。  
では伊東さんお願いします。

**伊東**／私もちょうど今同じようなことを言おうかなと思っていたんですが、やっぱり今人口が減っていく中で、今まで当たり前に行っていたことができなくなって、戸惑っていることもたくさんあると思うんですが、同じように頑張っている方たちが、全国にたくさんいらっしゃるということがこのシンポジウムでわかりましたので、ぜひそういった事例なんかも学びながら、皆さん、お互いに頑張っていきたいと思いますので、終わりたいと思います。

**指出**／ありがとうございます。  
意見交換とステージのモニターには書いてありますが、ゆくりとした意見交換の時間はあまりありませんでしたが、ご登壇者のみなさんとお来場者のみなさんと心の交歓はしっかりとできたと思います。それが一番大事なことだと思いました。過疎地域のシンポジウムで、自分たちだけじゃないんだということが感じられて、未来を作るチャンスやきっかけはこうやって生まれるんだなということをお互いに共有認識として得られた2日間だったのではないのでしょうか。そういうふうに思います。  
ともあれ、氷見市の皆さん本当に温かく迎えてくださってありがとうございました。  
ぜひ、面白く街の未来をつくる4組の実践者の皆様の取り組み、皆さんのお手元にある優良事例表彰の冊子にも書いてありますので、読んでいただけたらと思います。

では、改めましてご登壇いただいた4名の皆様ありがとうございました。  
大きな拍手をお願いします。

